

マタイによる福音書 3:1~12

私たち日本人の一つのたしなみとして、世間話のようなところでの宗教、政治の話は、極力控えることが言われていますが、それは、人の思想信条に関わるものに触れる事は、場合によっては、相手の個人的な領域に不用意に踏み込むことにもなりかねないからです。ですから、不必要な諍いを避けようとするそうした先人の知恵は、それゆえ私たちも身につけておくべきことでもあるのでしょうか。そして、それは、私たちの信仰と照らし合わせてもは間違いではありません。なぜなら、私たちの信仰は、自らの正統性を主張することではないからです。しかし、それが、そのまま、私たちが何もせずに、日々、個人的な安心立命だけを願ってればいいということでもありません。律法学者たちから「あらゆる掟の中で、どれが第一でしょうか」と尋ねられたイエス様が「第一の掟はこれである。イスラエルよ、聞け、私たちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神と尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。第二の掟はこれである。「隣人を自分のように愛しなさい。この二つに勝る掟は他にはない」と答えたように、全身全霊をもって主なる神様を愛し、隣人を愛することを自らに課しているのが私たちクリスチャンでもあるからです。

そこで、早速今日の御言葉に聞いてみますと、先ず言われていることは、「そのころ」というこの一言です。それゆえ、その頃とはいつなんだ、ということにもなるのですが、そこで、その直前を見てみますと、そこに記されていることはイエス様の誕生についてです。ですから、その頃というのは、イエス様の子供の頃かということにもなるのですが、しかし、次の段落の最初のところを見てみますと、そこには、「その時」とあり、そして、その直後で語られていることはイエス様の洗礼の出来事です。このことはつまり、その頃、というのは、いわゆ

るイエス様の公生涯と言われている、この救い主としての活動が始まった時期ということであり、しかも、ここでは、洗礼者ヨハネが「悔い改めよ。天の国は近づいた。」と声を大にして語っているのです。このことはつまり、いよいよ救い主の活動が始まるぞ、と、洗礼者ヨハネがさかんに言い始めた時期であるということです。そして、この洗礼者ヨハネについては、御言葉が「これは預言者イザヤによってこう言われている人だ」とお墨付きを与えていることから分かるように、ユダヤ全土から大勢の人々が集まってきて、しかも、宗教的権威であるファリサイ人やサドカイ派までもが洗礼者ヨハネの許に馳せ参じたのはそれゆえのことでもありました。ですから、こういうところに、救い主がいよいよ到来するぞと言う、当時の人々の熱気を感じないわけには参りません。

しかし、その一方で、救い主への関心がどうしてそこまで高まったのかとも思うのです。それは、イエス様が救い主としての活動を開始したのが30歳の時と言われているわけですから、その頃というのは、30年のブランクを経て、その誕生からいきなり公生涯へと話の場面が切り替わったということであり、それゆえ、いささか強引なようにも思うのです。そのためにまた、この唐突さが一貫性を欠いた印象を私たちに与えることとなり、それゆえ、どこかご都合主義的な臭いを感じてしまうのです。ですから、もしそれがここでの聖書の御言葉のメッセージであるとすれば、いよいよ始まるぞというこの熱気を無批判に受け入れていいのかとも思うのです。ただ、御言葉は、そうした私の疑問にはまるで答える気がないようで、「人々がヨハネの許に来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた」と語り、「その頃」と言われている当時の人々の救い主を待ち望む真剣な姿とその真面目な信仰を私たちに伝えるのです。ですから、人々のそう

した姿を思うと、やはり、疑り深い私でも素直な気持ちで御言葉に聞いていきたい、いかないと、そんな思いに駆られたりもするのですが、このことはつまり、御言葉には、そのように疑り深い人間を素直にさせる力があるということです。けれども、素直にさせる反面、これは、自分にも思い当たるところがあるからですが、その一方で、イエス様がファリサイ派とサドカイの人々に語った「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、誰が教えたのか」といった、こう言う厳しい言葉に敏感に反応したりもするのです。それは、私たちの頭で考えていることが、その心ままに感じるところと一直線に繋がってはいないからです。また、繋がっていないから、一端、火が付くと私たちも熱狂してしまう、信仰にはそういう一面があるのですが、それは、私たちが常に心のどこかに生きる上での不安を抱えているからです。

そこで、この30年のブランクを想像してみてください。30年という世代が一巡りする期間で、その間、物事が何も動かなかったということです。それゆえ、このブランクは、人々の不安を助長させたことでしょうし、それゆえにまた、救い主の到来を諦めさせるには十分な時間であったとも言えるのでしょう。そして、人々をしてそのように思わせた一因は、幼子イエス様の身の上で起こった現実がそのまま当時の人々を包んでいたからです。しかも、ここでは、宗教的権威であるファリサイ派やサドカイ派の人々までが洗礼者ヨハネのもとを訪ね、人々と同じように安心を得たいと願ったわけですから、そうした時代状況の中で、人々の閉塞感は相当の高まりを見せていたということです。それゆえ、ヨハネの来るぞ、来るぞ、というこの呼びかけは、それだけにまた人々の期待値をさらに高めたに違いありません。しかし、宗教的な権威までがこのヨハネのことを認めたということは、また別の意味を持っていたということです。つまり、宗教的に権威ある人々が別の権威におもねったということであり、このことはつまり、これまで築き上げてきたものが崩壊しつつあったということです。しかも、ここでは洗礼者ヨハネがこの宗教的権威に悔い改めを求めているわけですから、

敬虔な人々の権威は失墜し、いわば、革命前夜の様相を呈していたということでもあるのでしょうか。ただし、御言葉が私たちに伝えようとしていることは、もちろん、そんな革命前夜の熱狂などではありません。それは、私たちの信仰は若気の至りなどではないからです。

救いを求め、自らの下にやって来た宗教的権威に向かって、ヨハネが厳しい態度で臨んでいるのは、この敬虔な人々が矜持を失ったからです。それは、彼らの人々に対して安心立命の根拠として律法の頑なな遵守を語りながらも、あろうことか、人々と同じように我先にと洗礼者ヨハネのもとを訪ねたからです。そして、こういうことが歴史の中で何度も繰り返されてきたことは私たちも知っています。一つの時代が終わり、一つの時代が始まろうとするとき、こういうことは必ず起こり得ることであり、そして、御言葉が語るころは、こういうことが神の民の中にあっても絶対にはないことではなく、必ずあるということです。けれども、その怒りの矛先が向かうところはこの不甲斐ない、情けない人たちをただ糾弾することではありません。ヨハネがここで伝えようとしていることは、神の国が近づいた以上、すべての人々が悔い改めなければならぬということです。そして、この悔い改めということでありませんが、それは、少しばかり反省し、心を入れ替えて終わるようなものではありません。神様ごめんなさいと口にすればそれでいいものではなく、悔い改めにふさわしい実を結べと厳しい口調で言うように、私たちに求められていることはそれを形に現すことだということです。まただから、ヨハネは「わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けている」と語ってもいるわけですが、ではヨハネが語る悔い改めにふさわしい実とは何なのでしょう。これは少し前の礼拝でも申し上げたことではありますが、悔い改めとは、私たちが神様の前で丸裸にされる経験をすることです。従って、こうして御言葉に聞いている私たちは、神様の御前にあって、そういう意味で、今丸裸にされているということでもありますが、そこで、皆さんは、そういう自らを見つめ、何を思うのでしょうか。

御前にあってこうして御言葉に聞き、丸裸にされた自分自身を恥ずかしいと思うのでしょうか。それゆえ、丸裸にされたことについて侮辱されたと思うのでしょうか。その感じ方はそれぞれまちまちなこととは思いますが、そこで、もし、御前にある私たちの気持ちが今申しましたとおりのものだとしたら、それは、信仰的にどういうことになるのでしょうか。答えは、信仰的に私たちは間違っているということです。なぜなら、人が善悪の知識の木からその実を食べる以前、神様の御前にあって、丸裸であることに恥ずかしさをまったく感じるものがなかったのが私たちであるからです。そして、それは、人が恥知らずであったからではありません。何一つ隠す必要がなかったからであり、ところが、罪ゆえに、人は神様にすべてを隠そうとすようになった、しかも、その御前にあってもなお、隠そうとしてしまう、御前にある私たちには、そういう一面がある、いや、それが私たちの本質そのものでもあるということです。

ですから、そのような場面に直面して、そこで私たちが思うことは、こういうこと、あるある、あるよねということでもあるのでしょうか。そして、現にそういうことはあるわけですから、それについてあれこれと説明したところで意味はありません。洗礼者ヨハネが悔い改めへと導くと言っているように、私たちの信仰においては、神様の御前におけるそういうドタバタ劇は日常茶飯事であり、そして、それは、神様の御前にあって私たちが何者かになろうとするとき、そこで様々な悲劇、喜劇を演じることにもなるからです。なぜなら、私たちは神様が正しいお方であることを知っているからで、つまりは、私たちには、このままではいけないと思うところがいろいろあり、そして、それが、ヨハネの前に集まってきた人々であるということです。それゆえ、そこで問われることは、私たちの神様に対する不誠実さ、つまり、偽善的な態度ということです。そして、この偽善的な態度ではありますが、それは、ファリサイ派とサドカイ派の人々がそうであるように、こうした偽善は、敬虔な装いの中に隠されていることが多いように思います。そして、それは、私たちが愛

を語りつつも、愛をなしえないように、時に、私たちが愛と思い込んでいるものの中に差し込まれているものが、この私たちの偽善的な態度でもあるのです。

こうして、私たちは、神様を前にして、悲劇、喜劇を演じることにもなるのですが、そうした中で、イスラエルの人々が心の支えとしたものが、自分たちが神様に選ばれている事実でした。洗礼者ヨハネがここで父祖アブラハムについて語っているのはそれゆえのことでもありますが、まただから、その思いを打ち砕くために、「神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」とヨハネは言ったわけです。それは、信仰というものは、これぞというものの上に胡座をかくことではないからです。それゆえ、ヨハネがここで言っている悔い改めということは、私たちがこれぞと思うものを手にすることができるできないの問題ではないということです。では、悔い改めとはどういうものなのか、言葉の意味としては、神様の方に目を向けること、むき直すということでもありますが、それゆえ、ヨハネのもとに集まってきた人々はすべて、自分は神様の方を向いていると思って集まってきた人々であったということです。

そして、それは、この人たちだけではありません。イエス様の弟子たちも、その周りに集まった大勢の人々も、自分の眼鏡に適い、この人は、このお方だけだと思ひ集まってきた人々でした。そして、それは、もしかしたら、私たちもそういうものなのかもしれないかもしれませんが、その私たちが悔い改めという言葉を繰り返す耳にし、また言葉にしている、ですから、さぞかし、そのことがよく分かっているとも言えるのでしょうか。では、自分が神様の方に向いていると、皆さんは、どれほどこのことに実感しているのでしょうか。恐らくは、頭では分かっても、心ではそれを感じられない、あるいは、心でそれを感じても、頭では上手く整理することができない、そういうことが多いのではないのでしょうか。そして、それは、生ける神様の存在と、いわゆる、学問的な意味での神という概念、定義とがぴったりと上手くはまっていないからでもありますが、それはまた、神様についていろいろなことを言う人たちが

いるからです。それゆえ、そういう意味で、一貫性を欠いているのがこの神様のイメージであり、また考え方もあるのでしょうか、ただし、それは、聖書を読んでいくと分かることでもあります。アブラハムとモーセが抱いた神様のイメージが同じではないように、預言者たちが抱いた神様のイメージも、知恵の教師たちが抱いた神様のイメージも、つまりは、聖書が私たちに明らかにする神様のイメージは、時代時代によって必ずしも同じではないのです。まただから、そこで私たちは、一生懸命に頑張っただけで悔い改めないと、必死になって悔い改め、神様に近づかないと、そして、もっともっと神様のことを知らなければならないと、そんなことを考えたりもするのでしょうか。けれども、そういう一生懸命さはとても貴いことではありますが、私たちの信仰とはそういう私たちなりの努力の結果を現すものではありません。

冒頭で、私たちの信仰は、全身全霊を込めて神様と人とを愛することだと申しましたが、それはその通りです。ただし、そこで、私たちが、もし、ある種の洗練した姿、態度というものを思い描いたとしたら、それはいかがなものなのでしょう。なぜなら、全身全霊を込めて、ということは、大人ぶったりすることでもなく、また、知ったかぶったり、偉ぶったりすることでもないからです。ヨハネが悔い改めを語る際に、自分の後に来るイエス様のことを大きく取り上げているように、そもそものところでは、このイエス様の到来が私たちにとって福音であるのは、神様の方から私たちの方に近づいてくださったからです。それゆえ、神様がその独り子を見るように見つめられているのが私たちであり、従って、私たちが頑張っただけで神様の子のように、また、神様の幼子のように振る舞おうとすることは、そもそものところでは不自然なことであり、神様にとっては無理はするなと言いたいところでもあります。ですから、神様の方から私たちに近づいたと言うことは、そこで、私たちに神様が求めるものは、私たち本来の姿を取り戻し、日々穏やかに過ごすということです。ただし、それは、神様の上に私たちが胡座をかくことではありません。しかも、独り子を十字架につけてまで、

私たちが御国へと招こうとされているのがその御心であるわけですから、私たちが畏れをもって神様を見つめるということ、それが私たちに求められていることでもあるのですが、けれども、それは同時に、地上に生きる私たちが、なおその不安を直ちに払拭できずにいるからです。しかし、その私たちのことを終わりの日までを導いてくださっているのが私たちの神様なのであり、それも、私たち真面目に懸命に自分一人だけがと我を張るように頑張っているからではありません。生きるということが人と一緒にいるということであるように、まさに、私たち一人ひとりをそう意味でつなぎ合わせ、一塊として導いてくださっているのが私たちの神様であり、ですから、そういう意味で、私たちは何ものにも臆する必要はありません。自分のことをひけらかす必要もなく、また神様を信じているということこそを自慢する必要もなく、ただ、イエス様と共にあることを喜び、共に歩み続けること、私たちに求められていることはこれに尽きるものであり、だから、イエス様の到来が全ての人々にとって福音と呼ぶことができるのです。従って、悔い改めにふさわしい実を結ぶということは、この喜びに与りながら日々私たちが過ごすということです。

ですから、悔い改めとは、そういう意味で、神様の恵みの元に行かれていますへの気づきであり、そこにイエス様が一緒にいてくださっていることの喜びです。何かをしたい、何かをしなければ、というそういう問題でなく、ただ御心に安らぐ、それも、全身全霊をもってそれを味わい知る、そういうことであると思うのです。そして、この一巡りの歩みの中でそのことを味わい知ったのが私たちであり、その私たちに神様はイエス様と共に新しい歩みへと導いてくださっているのです。ですから、全身全霊をもって、そのことの喜び、そのことへの感謝をこの一週間、関わるすべての人々と共に分かち合う私たちでありたいと思います。祈りましょう。